

結核感染第一類(處女地急性結核)ニ就テ(第一報)(續)

有馬 石原 賴吉 巖

第一表

番號	姓 名	性	生年月日	發病 時 齡	診 斷	發病年月	死亡年月	經 過	推定傳染 機會ヨリ 死亡ニ至 ル月數	備 考
13	■	♀	明一八・	四六	肺結	大一〇・二				治愈
12	▲	♀	明三七・六	一六	頸、肺、腸結	大正九・三	大九・六	三ヶ月	二〇	
11	■	♀	大正一・二	一二	頸、結	大一二・一〇				生存
10	■	♂	明四〇・三	一六	頸、肺、腸結	大一二・一〇	?			生存、極重症
9	■	♂	明四二・五	一〇	結核性腦膜炎	大正八・五	八五	二週		
8	■	♀	明一九・三	三三	肋、肺、腸、結	大正八・三	一〇・一〇	四三ヶ月		
7	▲	♀	明三六・五	一六	肺結	大正八・二	八六	四ヶ月		講習會へノ輸入者
6	■	♀	明三八・一	一三	肺、腹、腸結	大正七・三	七六	四ヶ月		7ノ親友
5	■	♂	大正七・二	一	弱質		七五			4ノ第二入夫ノ子
4	■	♀	明二二・二	二八	肺結	大六・二?	大七・四	六ヶ月?		2ノ姉
3	■	♂	明二二・九	二九	肺結	大正三・五	大三・七	三ヶ月		2ノ婿
2	■	♀	明二八・二	一九	肺結	大正三・三	大三・六	六ヶ月		馴地ヨリ輸入者
1	■	♀		六二	肺結	大正七・一〇				生存・外ニ家族三人健全

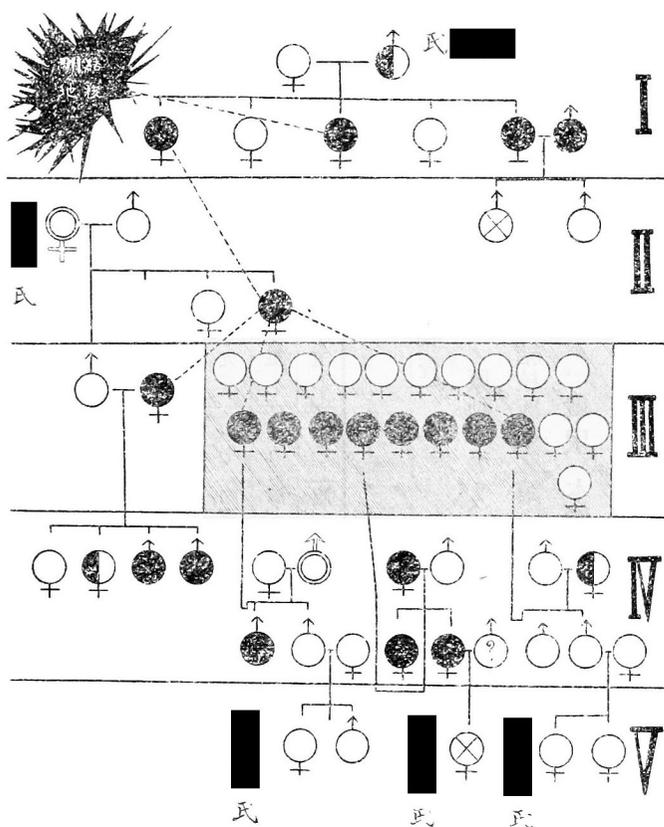
26	▲	♀	明三五・五	二〇	腹、腸間膜腺						大正十年九月生存
25	▲	♀	明三六・五	一九	肺、腹結		一〇・二		一四		
24	▲	♀	明三七・九	一七	肺結		九・九		一九		
23	▲	♀	明三七・二二	一七	氣腺、肺		九・六		一六		
22	▲	♀	明三七・九	一七	肺結		九・四		一四		
21	▲	♂	明三五・二二	二一	肋膜、結	大一二・八	一二・一〇	二ヶ月			兵役中死亡
20	▲	♀	明三八・六	一七	腸間膜腺結、粟粒結	大一〇・四	大一〇・九	六ヶ月	三一		
19	▲	♂	明三〇・	三三							15ノ入夫罹患疑アリ
18	▲	♀	大正一一・	一	弱質		一一・六				15ノ子
17	▲	♀	明四・五	五三	肺、喉頭結	大正	一四・三	一〇ヶ月			右三人ノ母
16	▲	♀	明四〇・一	一六	腸結		一二・五				不明時
15	▲	♀	明三二・六	二三	肺、膿胸	大一一・三	一一・四	一ヶ月			七人家族
14	▲	♀	明三五・九	二〇		大一〇・二	一〇・六	四ヶ月	二八		五人死亡

▲ハ裁縫補習生徒デアル。

第三例(石原調査)

本流行例ハ余等ガ本論ヲ起稿スルノ原動デアリ、其傳染ノ系統ガ殊ニ明カニシテ、且ク最モ數奇デアリ、此小流行史ノ存在ガ明カトナツテ、有馬ノ所謂結核感染ノ第一類即チ結核病ノ本型ガ、如何ニ他ノ急性傳染病ト其流行型ヲ一ニスルノデアルカヲ知ルニ足ルモノデアアル。就中、本例附圖表ノ第三段マデハ去年十月アシニフ教授ニ大ナル興味ヲ喚起シ、同氏ヨリ是非之ヲ速ニ報告スベク從憑セラレタル所ノモノデアアル。以下、本流行發見ト調査ノ次第ニ從ツテ之ヲ記載スルコトトスル。

處女地結核傳染系統圖



原著 有馬・石原「結核感染第一類(處女地急性結核)」ニ就テ

第三段傳染及流行(圖表參照)。

本流行例ハ鳥取縣○美郡○里村○德尋常小學校ニ於テ大正八年一月ヨリ三月ニ至ル期間同校教員住宅ニ於テ行ハレタル裁縫補習會ノ生徒間ニ發生シタル結核流行ノ例デアツテ、大正八年ヨリ以降突如トシテ多數ノ結核患者ヲ發生シ來ルニ驚カサレテ本調査ヲ開始シタルモノデア

ル。本村ハ鳥取市ヨリ南方一里餘ノ所ニ在リ、鳥取平野ノ中央ヨリ南際ニ位スル純農村デア

ル。本地方ハ土著者ニハ結核性疾患ハ殆ンド絶無ト謂フベキ健康地ニシテ、所謂結核處女地デア

ル。本補習會ノ教室ナルモノハ校舍ニ隣レル

教員住宅ヲ代用セルモノデアツテ、疊敷ノ普通家屋デア

ル。本傳染ノ機會ハ補習教育ナルガ故ニ出席モ比較的の自由ニシテ、從テ出席率ハ甚ダ不良デアツタガ、出席率高キ者ガ多ク罹患セル如キ傾向ガアル。

補習室内ニ於ケル女生等ノ生活状態ヲ探索スルニ、裁縫用器具ヲ共同ニ使用スルハ素ヨリ、副食物ヲ自炊シテ共同ニ食シ、食器モ通常共同デア

ル。想フニ、復々相擁シテ歌唱譚笑ノ機會モ屢々アツタデア

此大正八年ノ補習會生徒ハ二十三名デアツタガ、其中九名即チ三九%ガ結核性疾病ニ罹レルモノデアル。

○里村ハ大字ガ七村アル、其中最モ多數ノ患者ヲ發生セルハ東○路デアツテ、補習生八名中、罹患五名ヲ占メテ居ル。之ガ即チ圖表ニ記スル第二段ノ傳染デアアル。

系統的調査

斯クモ多數ノ女生徒ガ、殆ント同時ニ結核性疾患ニ罹リ、且ツ相踵デ速ニ死亡セルハ實ニ奇異ノ事象タルト俱ニ驚愕スベキ悲惨事デアツタカラ、一時種々ノ流言ガ行ハレ、原因及其系統ガ種々ニ揣摩セラレタガ、終ニハ此裁縫補習室傳染ヲ疑フ者無キニ至ツタガ、其補習會ニ於ケル菌源ノ輸入者ハ容易ニ決定サレナカッタ。然ルニ、罹病者ノ一人(第一表參照)「ハ大正八年三月、即チ同補習會出席二ヶ月餘ニシテ蚤クモ既ニ重症トナリテ、通學不能トナリ中途退學ノ已ムナキニ至リ、間モ無クシテ死亡シタノヲ以テ見ルニ、同女ハ其通學當時ヨリ既ニ開放結核患者タリケルコト殆ント誤ラザル推定デアアル。乃デ此「女ノ家系ニ立チ入ツテ調査ヲナスニ及ビテ、初メテ此悲惨事ヲ釀成シタル根源ヲ突キ止メルコトガ出來タノデアアル。是ニ由テ、同一裁縫補習會内ニ於ケル同一罹患者ト見エタル「女ハ實ハ同一罹災者デハナクシテ、其補習會ニ於テ菌源ヲ輸入シタル者デアツテ、補習會ノ同席者等ヨリモ一傳代前ノ罹災者デアルコトガ明カトナツタノデアアル。乃デ、此人ヲ圖表中ノ第二段ニ置イタ譯デアアル。

馴地ヨリ病毒ヲ輸入セル經路

是ヨリ曩、本補習會ノ傳染源ト目セラル、「ガ最モ親シク交通セル「氏ト稱スル一家ガアルガ、圖表第一段ニ表ハシタルガ如ク、老夫婦間ニ五人ノ女子ガアリ、第一表ニ示セル如ク、大正三年ヨリ同七年ニ互リテ相踵デ一家五人ノ死亡者ヲ出シ、其中三人ハ皆肺結核デアリ、一人ハ肺、腸、腹膜結核デアル事實ガアツタ。此事實モ亦實ニ斯ル僻村ニ於ケル驚異ノ出來事デアツテ、種々取沙汰ノ種トナツタガ、石原ハ調査ノ結果、此「氏ト補習會傳染源ノ輸入者タル「トノ關連アルコトヲ容易ニ指摘スルコトガ出來タ。

即チ「氏ノ第三女「(第一表第二號患者)ハ大正三年六月ニ肺結核デ死亡シタガ、此人ハ其前年カラ兵庫縣下ノ或

ル紡績會社ニ女工トシテ雇ハレ、疾ヲ得テ歸還シ、後間モナク瘧レタガ、是ゾ即チ、馴地ヨリ此處女地へ結核病毒ヲ輸入シタル者デアツテ、其後十有二年ニ互ル今日、猶ホ此僻村ニ餘燼ヲ燃ヤス燎火ノ元ヲナシタルモノデアアル。

氏ニ在テハ此第一患者ノ死亡ノ翌月蚤クモ第二ノ肺結核死亡者ヲ出シタ。ソハ、第一死者ノ姉ナル、長女「**二**」ノ入夫デアツテ「**一**」(第一表第三號)デアアル。此第三號患者ガ、第二號ト如何ナル程度ノ親密サヲ以テ一家ノ中ニ生活シタルカハ明カデハナイガ、他ニ病因ナキ村内ノコト、殊ニ同一家内ニ起臥飲食スル一家族ノ間柄デアアルカラ、偶然ノ機會ニデモ斯ル峻烈ナル傳染ヲ受ケタルモノト見ルノ外ハ無イ。

其後約三ケ年間ハ一時消熄ノ形勢デアツタガ、禍根ハ實ハ未ダ絶レテハナカツタ 第三號ノ妻「**三**」ハ先夫死亡ノ後第二入夫ヲ得テ、大正六年妊娠シ、其妊娠後期ナル六年十一月ノ交(?)發病シ、七年二月分娩、後二ケ月ニシテ、同年四月死亡シタ。此人ノ發病ハ今少シク以前デアツテ、病型ハ稍ヤ馴地結核ノ型ヲ取ツタトイウ推定モアルガ、今ハ審カデハナイ。兎モアレ此人ノ傳染經路ハ大正三年ニ死亡シタル先夫ニ在ツタコトハ殆ント疑フベキ餘地ガ無イカラ、發病ハ今少シク以前デアツタカモ知レナイ、而シテ、妊娠スルニ至ツテ、其後期カラ著シク増悪シ、辛フジテ分娩シ、間モ無ク瘧ル、ニ至ツタコトハ、妊娠ト結核トノ關係カラ觀テモ、極メテアリフレタ型デアアル。

此第二入夫トノ間ニ出來タ子供ハ生レテ所謂弱質デアリ、榮養モ不良ナリケルモノカラ、母親死亡ノ後一ケ月即チ生後四ケ月ニ滿タズシテ死亡シタ。此兒トテモ結核デナイト云フ證明ハ無イガ、今ハ死亡診斷書ニ從ツテ、弱質榮養不良ト云フコト、スル。此子供ノ兄ニ當リ、先夫ノ子デアアル一童兒ハ幸ニモ今猶健全デアアル。又同家ノ二女(圖表參照)ハ此家ニ結核病原ノ輸入サル、前ニ他ニ嫁シテ家ニ在ラズ、今猶健全デアリ、第三女ハ即チ病毒輸入者デアアルガ、第四女ハ當時家内ニ起臥シテ居タガ、幸ニモ現ニ猶ホ健全デアアル、此家ノ老父ハ今年(大正十四年)六十五歳トイフガ、大正十年ノ頃一時頑固ナル氣管炎ヲ發シ、後肺炎ニ輕キ浸潤ヲ貽シ、即チ第二類ノ結核型ヲ現ハシタガ、現ニハ殆ント症狀ハ無イ。

(此老父ハ傳染若クハ發病ノ順序デハ同家中最終ノモノデハアルガ、年齢ノ關係上第一號トシタ)。

第四號及ビ第五號ノ母子ガ僅ニ一ケ月ヲ隔テ相踵デ不幸ニ瘧レテ、更ニ一ケ月ノ後此家ノ第五女即チ第六號「**六**」ハ肺

結核、腹膜炎、腸結核ヲ以テ、亦タ餘リ長カラザル經過ノ後、瘧ル、ニ至ツタ。此女兒ハ當時滿十三歳ニシテ、尋常小學ノ六年ヲ終ツタバカリデアツタガ、其學業ヲ終ル頃ニ發病シタモノト云フカラ、經過ハ僅カニ四、五ヶ月ヲ出デナイ急劇ナモノデアアル。

是ガ圖表第一段ノ流行デアアル、素ヨリ約七年間ニ互ル此一家ノ慘劇ハ一頓ニ發生シタル流行デハナイガ、今ハ同一家内ノ此記載ヲナス爲メニ便宜上其後ノ流行ト區別スルタメニ之ヲ特ニ一段欄内ニ收メタモノデアアル。而シテ此■■氏ノ家族傳染ガ上記ヲ以テ終リトスルナラバ、舊來到ル所ノ處女地ニ於テ、若クハ馴地ノ家族ニ於テモ往々現ハル、所デアツテ、前ニ有馬ノ調査セル所ノ第一例、第二例ト異ナル所無キモノデアアルガ、此慘劇ハ不幸ニモ之ニテ止マラズシテ更ニ此■■家ノ第五女ナル■■「カラシテ、交遊最モ親密ナリケル隣家ノ次女■■」ニ傳染スルニ迫ビテ彼ノ補習會ニ於ケル慘劇ヲ釀成スルニ至ツタモノデアアル。

斯クシテ裁縫補習會ニ病毒ヲ運ビタル■■「ハ其家庭ニ於テ當時既ニ四兒ヲ舉ゲタル嫂ニ傳染シテ之ヲ瘧シ、其四兒ノ中一人■■」(第一表第九號)ハ其母ノ發病後當時十歳ニシテ結核性腦膜炎ヲ以テ、既ニ病母ニ先ツテ斃レ、其弟■■「(第十號)ハ大正十二年頃腺病ノ型ヲ以テ發病シ、今大正十四年三月將ニ瀕死ノ肺、腸結核デアアル。尙其妹ニモ感染シテ早晚同一ノ運命ヲ辿ルモノト觀ラレテ居ル。

猶補習會ニテ傳染シタル八女ノ中、現ニ判明シタルモノトシテ三人ガ各々家庭ニ病毒ヲ輸入シテ茲ニ圖表中第四段ノ流行ヲ來シタ。即チ補習生ノ一人。

■■「(第一表第十二號)ハ自ラ頸腺腫ヨリ肺腸結核ヲ以テ三ヶ月ノ經過ニテ瘧レタル上、其母當時四十六歳ナル人ハ娘ノ死後八ヶ月許ニシテ輕熱ヲ以テ輕症ノ肺結核ニ罹患シタ。此人ハ幸ニモ一年有餘ノ醫治ニヨリテ現ニハ自覺ノ症狀ハ無クナツタ。此■■氏ニ於テハ補習會ニテ感染シタル一女ト此母親以外ノ六人ノ家族ハ現今ニ於テ全然結核罹患ヲ免レタルモノト觀ラレル、之モ特ニ注目ニ値スル事柄デアアル(後節考案ノ項參照)。

更ニ悲惨ナルハ補習生ノ一人、

〔第一表第十四號〕ノ家族内傳染ノ狀況デア。圖表ニ於テ見ラル、如ク、同女ハ〔第一表第十四號〕氏ノ第二女デア。初メ腹膜炎、後ニ腸、肺結核ヲ以テ僅ニ四ヶ月ノ經過ニテ大正十年六月殞ル、ヤ、其姊〔第一表第十四號〕ハ大正十一年三月産褥中ヨリ發病シ、急劇ナル破壞性ノ肺結核ニ侵サレ、膿胸ヲ發シテ僅々一ヶ月ノ經過ヲ以テ殞レ、其嬰兒モ二ヶ月ノ後ニ死亡シタ。此嬰兒ノ死因ガ結核性疾患デアツタカ否カハ明カデハナイガ、少クトモ母親ノ急死ガ其近因ヲナシタト見ルコトニ差支ハナイ。更ニ此三人娘ノ殘一人タル〔第一表第十六號〕モ大正十二年腸結核ヲ以テ殞レ、最近ニ至ツテ尙一人ノ犠牲トシテ、此三女ノ母〔第一表第十七號〕ハ大正十三年六月頃發病シ、肺結核、喉頭結核ヲ以テ本年三月、此最終ノ調査ヲナスノ月首死亡スルニ至ツタ。即チ此〔第一表第十七號〕氏ハ家族七人ノ中五人、殊ニ女子ノ全部ガ悉ク補習會傳染ノ犠牲トナツタ譯デア。尙第十五號患者ノ夫〔第一表第十八號〕モ最近ニ至リテ健康狀態惡シク、結核性疾患ノ疑ガアル。

更ニ裁縫補習生ノ一人タル

〔第一表第二十號〕ハ大正十年四月發病シ、腸間膜腺結核ヲ發シ、終ニ粟粒結核ノ症狀ヲ以テ斃レタガ、其實兄〔第一表第二十號〕ハ大正十二年兵役服務中肋膜炎ヨリ腹膜炎ヲ發シテ僅カニ二ヶ月ノ經過ヲ以テ死亡シタ、此家デハ父親既ニ亡ク、他ニ五人ノ家族ガアルガ、幸ニ現今デハ皆健全デア。

裁縫補習生ニシテ罹患セル他ノ五人ノ中、

〔第一表第二十一號〕

〔第一表第二十二號〕

〔第一表第二十三號〕

〔第一表第二十四號〕

ノ四人ハ第一表ニ於テ見ルガ如ク孰レモ甚ダ短カキ經過ヲ以テソレソレ死亡シタガ、家族感染ノ徵候ハ今マデ未ダ現ハレナイ、恐ラク今後モ安全デアロウ。

今一人、

「第一表第二六號」ハ同シク裁縫補習中感染シタルモノデアツテ、腸間膜腺結核ヨリ腹膜炎ヲ發シ、大正十年九月未ダ罹病中デアツタガ、或ル事情ノ下ニ其後ノ消息ガ不明デアアル、或ハ既ニ死亡セリトモ云フ。

本例中「家ノ第五女」ト裁縫補習會ニ之ヲ運ビタリト目セラル、「」ノ交友關係ニ就キ、左ホド親密ナル交際ヲナシタルヤ否ヤニ關シ疑問トナルハ其年齡ノ相違デアアル。「家ノ第五女」ハ明治三八年生レノ當時十三歳デアリ、「」ハ三六年生レノ十五歳デアアル。併シ斯ル年齡ノ相違ハアルトモ同村内デハ往々特ニ親密ナル交際ヲ結ブ者ハアル、而カモ種々ノ狀況ニ於テ簡單ナル田舎ノ生活様式ニ在テハ親密ナル友人殊ニ獨身青少年者ニテハ往々ニシテ兄弟姉妹以上ノ親密ノ程度ヲ持スル者モアリ、斯ル場合ニハ各所屬ノ家庭ヲ放レテ互ニ來往擧ヲ俱ニシテ寢ルコトスラアルノデアアル。私等ハ講習室ニ於ケル交互ノ傳染狀態ガ殆ント觸接傳染ニ近キモノデアアルコトヲ容易ニ想像スルト同時ニ、此「家ノ第五女」ト其隣家ノ「」女トノ親密ナル交友關係ヲ年齡ノ差ニヨリテ疑ハウトハ思ハナイ。

第三例ノ概括

『大正三年中一女工ニヨリテ或ル結核馴地ヨリ、山陰ノ或ル處女地タル一寒村ノ家郷ニ運バレタル、殆ント一家ヲ亡シ、近隣ニ延焼シ、更ニ一裁縫補習會ヲ介シ、一郷ニ傳播シテ計二十四人ノ結核罹患者、二人ノ嬰兒死亡ヲ出シ、罹患者中二十人ハ既ニ死亡シ、大正十四年三月ニ至リテ餘燼猶ホ未ダ消エナイノデアアル。吾人ガ見ヲ以テスレバ、所謂結核豫防ノタメニ百萬ノ「ボスタア」ヲ陳べ、醫界ノ名士ガ萬遍ノ結核豫防講演ヲナストモ、工場等ヨリシテ一人ノ肺結核患者ヲ其郷里ニ放還セシメザルニ如カズト思フモノデアアル』（石原記）。

附錄

第二表ニ作ル所ハ主トシテ余等ノ友人松島隨敬君ノ調査セル所デアツテ、余等ガ此記錄ヲナスニ當リ同君ヨリ寄贈サレタモノデアアル。附記シテ謝意ヲ表スル次第デアアル。

此第二表ニ出デタルハ悉ク有馬ノ郷國ニシテ、松島君ノ現住スル山陰ノ一漁農村デアツテ、近來ハ海水浴場ヲ設ケラレ、現今ニテハ既ニ全クノ結核處女地トハ謂ヘナイガ、結核ノ存在ガ明治以後ニ始マリタルコトハ殆ント確實デアリ、

原 著 有馬・石原 結核感染第一類(處女地急性結核)ニ就テ

三七

即チ未ダ馴地ト稱スベカラザル土地デアル。表中第一號及第二號患者ハ前記有馬調査ノ第二例ニ適スルモノデアル。

第二表 (松島隨敬君調査)

鳥取縣○美郡○富村ニ散發セル結核患者調査表

番號	姓 名	性	生年月	發病時	死亡時	感染場所	診 斷	死亡年月	經過日數	備 考
1		♀	明二七・三	二七	二八	自宅	肺結	六一・六	七ヶ月	夫肺結核死
2		♀	明三五・五	二一	二三	自宅	腸結	一一・二	五ヶ月	1ノ妹
3		♀	明三三・五		一七	シ紡績	肺喉核	五・一	三ヶ月	歸村後ノ月數
4		♀	明三三・九		一七	シ紡績	肺結	五・八	八ヶ月	右同
5		♀	明三三・五		一九	シ紡績	肺結	七・四	十二ヶ月	右同
6		♀	明三一・一		二六	自宅	肺腸結	一一・一	十一ヶ月	5ノ姉
7		♀	明三三・一		一九	シ紡績	肺結	七・九	十三ヶ月	歸村後ノ月數
8		♀	大 一・三		一〇	自宅	腸結	一〇・〇	八ヶ月	7ノ妹
9		♀	明三四・二		一八	シ紡績	腸結	七・一	十六ヶ月	歸村後ノ月數
10		♀	明三四・四		二〇	シ紡績	肺結	九・八	二十ヶ月	右同
11		♀	明三〇・一	二七		自宅	肺結	治療中	二十一ヶ月	9ノ兄嫁 重症
12		♀	明三三・九		一八		肺腸膜腺結	六・二	九ヶ月	
13		♀	明三四・一		二一	製絲工場	肺腸結	一一・一	八ヶ月	歸村後ノ月數
14		♀	明三四・三		二三	同	肺結	一一・二	十一ヶ月	右同
15		♀	明二八・		二七	自宅	肺腸結	一一・七	二十一ヶ月	二年前養父 肺結死
16		♀	明三四・	二三		自宅	肺腸結	治療中	九ヶ月	15ノ妹重症

▲印ノ六名ハ殆ド同時ニ同一紡績會社ニ入りタルモノナリト云フ。

本表ヲ通覽シテ、處女地結核ガ如何ニ其大多數ニ於テ急劇ナル經過ヲ取ルモノデアルカノ感ヲ益々深カラシムルモノデア
ル。

考 察

處女地結核流行ノ記載ヲナシ(若クハ馴地ノ小兒結核ヲ觀察シ)テ特徴トスベキコトガ三アル。其一ハ罹患發病セル者ノ經過ガ甚ダ急劇デアルコト、其二ハ肋膜炎即チ結核過敏症狀ノ發現デ佐多先生ノ所謂結核第二期症狀(肺結核ノ第二期デハ無イ)ノ殆ント絶無デアルコト、竝ニ其二ハ同一家族ニ在テ、若クハ彼ノ裁縫補習會ノ如キ同一室内ニ於ケル傳染ニ在テモ、殆ント明カニ、患者ト接觸セルコトノ親疎ニ從ツテ傳染ノ殃ニ殫ル、者ト、之ヲ免ル、者ガ岐レ、其間殆ント接觸傳染ニ近キ狀況ヲ思ハシムルコト、竝ニ罹患ヲ免レタル者ニ在テハ發病ノ微微ダモ無ク、截然トシテ健康ニ留マル者多キガ上、特別ナル傳播道ニ例之バ上記ノ森○氏ヨリ阪○氏ニ傳ハリタルガ如キニアルニアラザレバ、決シテ村内ニ蔓延スルコトナク、傳染ノ範圍ハ一室若クハ一家ヲ出デザルガ如キ傾向顯著ナルコト是デアル。

一、罹患發病セル處女地結核ノ經過ガ甚ダ急劇ナルコトノ解釋ニ就テハ、從來ノ考方デハ、例之バ、此等ノ地方ニ於ケル漁農ノ人士ハ其生活程度ガ低イカラ、病人トナリテ榮養ガ不適當デアリ、若クハ療病ノ法ニ不足アルカラトカ云フ如キ理由ト爲シ難イトハ謂ヘナイガ、私見デハ此等ノ理由ハ決シテ重キヲ置クニ足ラナイ問題デアル。其主タル原因ハ實ニ其各個體ノ結核免疫ヲ有セザルニ是レ由リテ斯ル急性ノ經過ヲ取ルモノデアアル。此點ニ關シテ余等ノ一人有馬ノ年來熱心ニ主張スル所ノ結核感染、發病、經過等ノ分類ハ最モ明カニ這般ノ關係ヲ語ルモノデアアルカラ、今一應左ニ之ヲ描出シテ參照ノ便ニ供スルコト、スル。乍序、此分類ハ大正十三年十月アシヨフ教授ノ刀根山療養所來訪ニ際シテ供覽シ、特別ナル賞讚ヲ博シタルモノデアアル。

結核感染ノ分類

第一類、結核病ノ本型、即チ免疫無キ個體ノ結核病。

結核菌侵入↓感染シ、速ニ發病シ、急性ノ經過ヲ取り、即チ急性肺結核、肋膜炎、腸、腹膜結核、粟粒結核等ヲ以テ多

クハ死ノ轉歸ヲ取ル。

第二類、變型第一、相對的免疫結核病。

結核菌侵入↓感染シ↓長キ潜伏期、腺結核期(佐多等ノ結核第一期)ヲ經テ、其間ニ若干ノ免疫ト、多クハ又「ツベルクリン」過敏性トヲ享受シ(佐多等ノ結核第二期ニ概當ス)、後徐ロニ慢性臟器結核ヲ惹起シテ臨牀的疾病原ヲ構成シ(佐多等ノ結核第三期)、其一部ハ屢々自然ニ、若クハ醫治ニ依テ治癒シ(佐多ノ結核第四期)、一部ハ免疫消耗増悪シテ瘳ル。

第三類、變型第二、完全免疫竝ニ不發性結核病。

結核菌侵入↓一部ハ感染セズ、一部ハ感染シテ所謂潜伏不發結核ニ終リ、其感染セザル者モ皆俱ニ免疫ト多クハ又「ツベルクリン」過敏性トヲ享受シテ臨牀的疾病原ヲ形成セザルニ終ル。

即チ此處女地結核、若クハ馴地ノ小兒結核ハ寄生性病原體タル結核本然ノ生物學的要求ニ適シ、人體ニ侵入寄生シテ、存分ノ發育ヲナシ猛威ヲ逞シウスルニ於テ、全然他ノ急性傳染病ト其軌ヲ一ニシタルモノデアツテ、之ヲ結核病ノ本型ト稱スルコトハ恐ラク異論無キ所デアロウ。

二、處女地結核第二ノ特徴タル結核過敏性症狀即チ肋膜炎等ニシテ、佐多先生ノ所謂結核第二期症狀ノ殆ンド絶無ナルニ近ク、本報告ノ第一例、第二例及ビ圖表ト第一表ニ收メタル特別ナル一流行竝ニ松島君惠贈ニ係ル第三表ノ調査統計四十七名ノ中唯二名(第一表第八號患者竝ニ第二十一號患者)ノミガ肋膜炎ヲ發シタルニ過ギズ、其中一名ハ兵役中デアリ、軍隊ニ於ケル肋膜炎發生ノ原因ハ其教練ニ至大ノ關係ヲ有シ、必ズシモ結核ニ基因スルト斷ジ難キコト甚ダ多キ由デアルカラ、萬一之ヲ除ケバ、四十七名中ノ唯一名ノミガ肋膜炎ヲ發シタコト、ナル。

佐多先生ノ所謂第二期症狀即チ結核過敏性症狀ガ、個體ノ免疫發生ト特殊ノ離ルベカラザル關係アルコトハ先生ノ多年力說セラル、所デアリ、既ニ周知ノ事柄デアルガ、處女地結核ニ於テ此症狀ノ殆ンド缺如スルコトハ先生ノ所說ノ正シキヲ證スルモノデアルト思フ。尙ホ、原發性腸結核ノ多キコトモ注目ニ値スル、余等ノ見ヲ以テスレバ、是等地方ノ勞働階級ニ在テハ、恐ラク當然ノ現象デアルト思フ。其因ハ主トシテ粗食ノ過食ニ在リテ、有馬ノ所謂臟器素因ガ之ヲ招致スルモノデアルト思フ(大正十年日本微生物學會總會、同年十月醫事公論、Zeitschrift f. The. Bd. 38, H. 3)。

三、處女地結核ノ感染ガ殆ンド觸接感染ニ近ク、一家ニ在リテハ殆ンド一室ヲ出デズ、一村ニ在リテハ一家ヲ出デザル如キ傾向顯著ナルコトハ最モ注目ニ値スル所デアツテ、特殊免疫法ニ賴ラズシテ結核豫防ヲ策セントスル者ノ最モ留意スベキ所デアル。此項ニ就テハ他日更メテ一論ヲ草スルノ機ガアロウカラ、今ハ唯ダ、結核傳染方法ニ就テハ余等ハ所謂塵埃吸入説ニ反對シ、フリッゲ學派ノ飛沫傳染説ニ左袒スルモノナルヲ揚言スルニ止メヤウ。

附言 一

此報告ニ出デタル結核屍ハ唯一例モ解剖サレナカツタ。ソレニ就テハ私共モ少カラズ遺憾ヲ覺ユルモノデハアルガ、併シ、ソレガ爲メニ甚ダシク不都合ヲ醸スコトハ無イト信ズル、即チ誤診ノ譏ハ受ケズトモ濟ムト思フ。何故ナレバ、結核、殊ニ肺結核、腸結核等ノ症狀ハ極メテ特異ナモノデアツテ、馴地即チ雜多ナ疾病ノ多キ土地ニ在テスラ、俗眼ニモ殆ンド誤ラル、コトナキホドノモノデアルガ、結核處女地ハ全體ニ病人ノ數ガ少ナク、結核ノ如キ著明ナル症狀ヲ現ハス疾病ハ無イカラデアル、是ゾ亦應テ吾々ガ、十年ニ亙ル傳染流行ノ經路ヲモ確實ニ追究スルヲ得タル原因デアアル。『解剖ヲナサズトモ結核ノ統計ニハ誤リハ少ナイ』ト曰ツタコホノ言ヲ想合シテ吾等ノ調査ニ誤リ無キノ信念ヲ固フスルモノデアル。

附言 二

我邦ニ於テ結核處女地ガ今尙ホ到ル所ニ磅磚タルコトハ緒言ニモ之ヲ舉ゲタガ、是等ノ地方カラ都會ヲ憬ガレ出デ、若クハ衣食ト賃金トヲ各種ノ工場ニ求メ、或ハ兵役ニ服シテ後、疾ヲ齎ラシテ再ビ郷關ヲ訪ル、者ガ歳ト俱ニ益々多ク、本報告記載ノ如キ慘事ハ之ヲ百倍、萬倍シテ、本邦結核死亡率増加ノ因ヲ爲シテ居ル。斯ル土地ニ於ケル結核新流行ノ状態ヲ調査シ、其蔓延防止ノ策ヲ講ズルコトハ、馴地ノ結核豫防ヲ爲スト俱ニ亦最モ重要ナル國力維持ノ方法デアラチバナラス。國家ノ衛生行政ヲ司ルノ士ニシテ、誠ニ結核防滅ノ前途ヲ深憂シ、『結核防滅ノ策ヲ講ズルハ一國ノ衛生行政ノ全體ニシテ、結核防滅策無キ衛生ハ眞ノ衛生ニアラズ』(佐藤正氏)テフ信念ニ邁進セバ、須ク速ニ、比較的容易ナルベキ處女地結核ノ調査防滅ニ力ヲ致スベキデアル。斯クテ、限ラレタル區域ニ限局スル結核流行ヲ撲滅スルノ方策ニ成功セバ、由テ以テ大區域ノ結核豫防ニ對スルヲ得ベク、結核防滅百年ノ長計ヲ樹ツルノ基礎ヲ固ムベキデアル。(終リ)。